

**General Mind で攻める 総合診療と臨床検査：コロナ・アフターケアを踏まえて**◎大塚 文男<sup>1)</sup>岡山大学学術研究院医歯薬学域・総合内科学<sup>1)</sup>

総合診療の醍醐味は、潜在する疾患の発見にある。多彩な症状・症候に基づいて症状の元となる病態を疑い、医療面接と身体診察による情報から総合的に病態を解析し、臨床検査や画像診断により確定診断を導いていく。私の専門とする内分泌疾患は、総合診療の臨床に潜在していることが多く、鑑別のための総合的・全人的な視点と臨床検査の両者を活かした **General Practice** の力が、その診断の鍵となる。

例えば、倦怠感・食欲不振・体重減少・頭痛・めまい・動悸・浮腫・しびれなど、原因となる臓器の特定に苦慮する不定愁訴に対しては病態的アプローチを行い、医療面接では患者の自覚する症状・病歴を単に聞くのみでなく、診断の鍵となる所見や徴候を探り出す姿勢が必要である。血圧・脈拍や体温の変動、体重や体格・体型の変化、皮膚の変化や浮腫、貧血や色素沈着、血糖値や脂質の変化、電解質や心電図の異常、骨粗鬆症や精神的変調にも着目し、臨床検査データをもとに全身症状と照合しながら総合的に判断することが重要となる。本講演では自験例を中心に、臨床検査の重要性と総合診療視点の楽しさをお伝えしたい。

また当科では、2021年2月から、倦怠感を中心に味覚・嗅覚障害、頭痛、不安、脱毛、睡眠障害、呼吸苦、微熱など様々な症状を呈する COVID-19 後遺症に対して、コロナ・アフターケア外来を設立して診療にあたっている。総合診療の強みを活かして携わってきたコロナ後遺症の現状とその診療への取り組みについても、あわせて紹介したい。